

寺田寅彦と雑誌『電気と文芸』

四宮義正

寺田寅彦が寄稿した雑誌に『電気と文芸』（電気と文芸社）という、ちょっと風変わりな雑誌がある。誌名に惹かれて探してみたが国会図書館には無く、大学図書館や文学館など数ヶ所に所蔵されているだけであった。しかし幸いにも先行文献がある。能地克宜の『『電気と文芸』という雑誌～一九二〇年代文学状況の一側面』（早稲田大学大学院教育研究科紀要別冊第九号（二）、2002年3月31日）である。主にこの論文と寺田寅彦の日記、書簡、著作リストから分かったことを書いてみる。

1. 雑誌の概要と寅彦作品の掲載

これは大正9年（1920）8月に創刊されて、翌年8月まで毎月1冊、合計13冊が刊行された短命の雑誌であった。創刊の辞から抜粋してみる。

「電気と文芸」を発刊し、汎く電気事業に従事する者を始め一般人士の為に、技術及び経営の専門的研究を為すと共に、精神高尚なる文芸上の趣味を涵養せしめ、併せて電気知識の通俗化に努め、独り電気事業関係者及び文芸愛好者のみならず社会民衆の為に、趣味と実益とを兼ねたる読物を提供することにした次第である。

当時発展していた電気事業と文芸という、極めて距離の遠いジャンルをまとめたユニークな企画であった。経営は雑誌の売上げだけでなく、資本主である岩淵電気工業株式会社からの出資と電気関係の広告費で賄っていたようである。編集兼発行人は辻嘉市となっているが、特に文芸関係は長谷川零余子が担当していた。

零余子の書いたと思える「編輯室にて」における発刊の辞を引用する。

一、電気が現代科学界、実社会の両面を兼ねた花形であること、
二、文芸が現代文化の中心であり思想界の花形であること、
此の二つの花形を実際の上に体现させたのが本誌なのであります。本誌発刊の抵触する処に決して軽率な企図ではなく、又現代に不自然のものでもなく、時代の要求に投じたものであります。本誌健気ながら此の任務を負うて行こうとするものであります。

零余子の意気込みが伝わってくるようである。実際、その妻である長谷川かな女は、『小雪』（昭和34年12月5日、水明発行所）で次のように書いている。

零余子は「電気と文芸」と言う妙な組合せの雑誌の編集をする事になった。ホトトギスの編集と小鼓(*)の配達をしているだけでは生活の立てようがないので、進める友人があるのを幸い「電気と文芸」に入社した。太陽型の大型雑誌は前半分が電気専門、後半は文芸に相当の頁を自由に使うことが出来ると云うので零余子が鬼の首を取ったように欣んだ。発行所

は銀座にあったので毎日出かけていった。電気の方では、学んだ薬学も幾分役立つらしく、文芸だけでなく、電気の記事も集めたり研究したりするらしく、毎日が愉^{たの}しそうだった。
(*小鼓は清酒の銘柄、ホトトギス発行所で取り扱って配達していた。)

大きさはほぼ B5 サイズ、後の号は総頁数が減ったが 100~120 頁が多い。誌名どおり電気事業記事と文芸がほぼ半々で構成されている。文芸部門では田山花袋、室生犀星、岡本かの子、若山牧水、芥川龍之介、杉田久女、菊池寛、宇野浩二、正宗白鳥、百田宗治などが出作している。その他当時の人気作家も多く、原稿を集めるだけでも忙しかった訳である。

寅彦は大正 10 年 (1921) に 3 回寄稿している。1 月 (第 2 巻 1 号)「文学の中の科学的要素」、3 月 (同 3 号)「漫画と科学」、5 月 (同 5 号)「蓑虫と蜘蛛」であるが、いずれも筆名は藪柑子となっている。この頃に吉村冬彦の筆名を用い始めたのであるが、零余子が『ホトトギス』に関係していたので昔を思い出したか、『電気と文芸』がマイナーなため気楽に古い筆名を使用したのかもしれない。

また、第 2 巻 1 号から表紙誌名の上に「科学と芸術の融合雑誌」と書かれるようになった。第 2 巻 3 号は「科学と芸術の総合論説」特集があり、石原純「科学と芸術の永遠性」、山崎楽堂「自然と科学と文芸と」も掲載されている。この時代に寅彦に相応しい企画の雑誌が頑張っていたことに驚く。

2. 日記と書簡の記載及び作品の掲載

日記と書簡から関連項目を時系列で抜き出してみる。また 3 作品の掲載も併せて記す。

〈日記〉大正 3 年 4 月 20 日

留守中に柏木義視氏来りし由。

大正 3 年 8 月 26 日

柏木氏より依頼の本松憲相氏^{（本松憲相）}在学証書送り来りたれば捺印の上届け出で、其旨同氏へ通知す。

大正 9 年 1 月 18 日

風呂に入って居たら本松憲相君が来た、去年の夏から中村研究所をやめて、私設の染料会社に行行って居るそう、実験室がないから研究などは出来ないと云って居た、大分ハイカラになって見違えそうである。

大正 9 年 11 月 9 日

夜本松憲相、次で阿部良夫君来る。物理教授法の不完全を論じる。

大正 9 年 11 月 15 日

電気〔と〕文芸の為に「文学の中の科学的要素」をかく。

大正 9 年 11 月 19 日

長谷川零余子^{（れいよし）}来り、電気〔と〕文芸へ時々寄稿を頼まる。ホトトギス時代の小品を出版せぬかとの相談を受く。

大正 9 年 11 月 25 日

夜本松君来る、先日零余子に科学欄を設くる事をすすめおきたるに正月号より実行する由にて本松君に材料を求め来し由、図書館にてサイエンチヒックアメリカンでも見て種をさがすよ

うにすすめる。

〈作品掲載〉大正 10 年 1 月 1 日

『電気と文芸』（第 2 卷 1 号）に「文学の中の科学的要素」が掲載される。

〈日記〉大正 10 年 1 月 7 日

国富君つづいて長谷川零余子来る。杉田久女ひさじよといふ人は文芸に対する熱望と家庭生活と相容れないので離婚しようとして迷って居るそうである。

大正 10 年 2 月 5 日

朝、電気と文芸へ「漫画と科学」をかく、午後気象計算。

〈書簡〉大正 10 年 2 月 5 日 小宮豊隆宛て

計算をやって居ると間違ばかりして愈々もって肝癪が増長する。其処へ又渋柿から原稿徴発令が下る。ローマ字雑誌の原稿も期限切迫に及ぶ かつて加へて長谷川零余子より雑誌「電気と文芸」へ前約の論文督促の電話がかかって来る。こうなると一年間のんきに飽和して居た頭の中が沸騰してしまつて何の事だか分からなくなつてしまいます。やけになつて何もかもみんな一時に書き散しておまけに朝日新聞の夕刊迄かいてやった。これでは折角講坐をやめて貰つて養生して居るのが何の為だかさっぱり分らなくなります。

〈日記〉大正 10 年 2 月 19 日

電気と文芸より原稿料届く。

〈作品掲載〉大正 10 年 3 月 1 日

『電気と文芸』（第 2 卷 3 号）に「漫画と科学」が掲載される。

〈日記〉大正 10 年 3 月 5 日

「電気と文芸」、中央公論来る。

大正 10 年 3 月 16 日

本松憲相君来り電気と文芸四月号に何か至急に書けとの事なりしも間に合わぬ故断る。

大正 10 年 4 月 12 日

午前、電気と文芸の原稿「蟻虫と蜘蛛」を少しかく。

〈作品掲載〉大正 10 年 5 月 1 日

『電気と文芸』（第 2 卷 5 号）に「蟻虫と蜘蛛」が掲載される。

〈書簡〉大正 10 年 5 月 1 日 小宮豊隆宛て〔はがき〕

零余子主宰の「電気と文芸」へ出した事について松根君から小言を頂戴した。松根君に云わせると R は大変イケナイんだそうです。僕の名を広告で見て「淡き哀愁を感じた」と云つて来たので僕も亦「淡き哀愁」を感じました。どうも僕は気が弱いから頼まれると何でもするし泣きつかれると泥棒でも人殺しでもやるかも知れないから宜しく監督をしてくれという事にして御詫を申送りました。「電気と文芸」のような人の注目しない雑誌へ書くのは馬鹿々〔々〕しいとアテコスリを云つてやろうと思つたがそれはよしました。

〈日記〉大正 10 年 5 月 26 日

午後阿部君来り次で長谷川零余子、杉田久女来訪。

〈書簡〉大正 10 年 7 月 12 日 長谷川諧三宛て（全集未収録、高知県立文学館所蔵、判読は筆者）

謹啓益々御清祥大慶至極に存候、扱て杉田女史より御手紙にて「鎖」といふものを書いて貴

下に御預けしてあるから、なんなら一遍見てくれとの事に有之候、電気と文芸へ出るのならば出てから拝見した方がいゝかと存候へ共如何に哉。」それから現在の環境に対して不満のやうな事もありましたが此れに就ては何と申上げていゝか分かりません。しかし遠慮のない考を云へば、もっと元気を出してセンチメントを脱却し、境遇にひきずられないで境遇を支配して行く努力をされた方がいゝではないかといふ気がする。そして矢張家庭の仕事に従事しながら文芸を追求された方が却っていゝものが出来はしないかという気がします。如何に哉

直接に返事を出していゝかどうか分かりませんから貴兄迄申上ります。御序の節宜敷御鳳声を祈候

草々

七月十二日

寺田拝

長谷川詞兄玉案下

〈日記〉大正 10 年 9 月 23 日

昼前木下君来る。長谷川零余子君来りするめと干鮑^{ほしあわび}を貰う。雑誌「枯野」創刊の由。

大正 11 年 1 月 14 日

〔発信欄〕杉田久女

大正 11 年 1 月 26 日

〔受信欄〕杉田久女

この時期、寅彦は胃潰瘍のため大学を休んで養生しており、職を辞めたいとの気持ちが強まっていた。先に引用した大正 9 年 11 月 25 日の日記の続きは「田丸先生来訪。本月限り辞職の積りを話す。藤沢さんの方では十二月になっても出勤出来ねば講坐だけを免ずる事に長岡先生と了解になり居る筈故、兎も角も長岡先生帰朝迄辞職は不穩当ならんと云わる」と書かれている。小宮宛て書簡にあるように、原稿でも相談でも頼まれると断ることができない性格を見込まれて、深刻な病状と精神状態にもかかわらず、次に述べるような来客も多かった。

3. 関連人物

日記などに登場する人物を調べてみた。簡単に履歴などを記す。

①本松憲相

五高同窓会名簿（昭和 14 年 10 月）によると、大正 3 年（1914）大学予科第二部薬学科卒業となっている。寅彦から 15 年後である。出身は福岡県、名簿発刊時には東京在住で、化学工業時報社に勤務している。

ここでも五高人脈が生きている。大正 3 年 4 月 20 日に寅彦が五高在学中に下宿していた柏木家の主人が訪ねてきたのは、本松のことを頼むためだと思われる。同年 8 月 26 日の記述は、大学に入って在学証書を送ってきたので、役所に寄留届けを出したのだろう。想像を逞しくすれば柏木家に下宿していたのかもしれない。大正 9 年 1 月 18 日に出てくる中村研究所は大正 6 年、戦争成金で門司在住の中村精七郎が出資して工業、化学、医薬、水産の研究所を創ったものであ

る。資金だけでうまく行く筈もないので、本松が辞めたとしている大正 8 年夏には実態が無くなっていたのであろう。大学を卒業して中村研究所で薬学を研究していたのかもしれない。

大正 9 年 11 月 9 日に寅彦を訪ねてきているが、日記で見る限り零余子より先である。或はこの時に『電気と文芸』への原稿を頼まれたのかもしれない。零余子とは薬学関係で知り合った可能性が高い。同年 11 月 25 日には科学欄について相談しているが、早速大正 10 年の 1 月号に「軌近の欧米科学界」と題して、種播き飛行機や無線電話について解説している。薬学士とあるから、東京帝大の薬学科を卒業したと思われる。

また同号には眠生という変名で「金米糖先生を訪う」が掲載されている。全文を紹介する。著者は本松と推定される。

今夜金米糖先生を訪れました。「丸善と三越」の話やら、「電気と文芸」の話を出されました。「電気と文芸」は月報を改めて文芸を付けたのだそうですね。十月号に正宗さんののが出て居ましたね。電気出の人たちばかりでなく、もっとゼネラルな事が書いてあれば我々派（物理派）の読者も多く得られましょう。」などと話されました。

「先生の御病気は唯今どの位の程度にお悪いのですか？」と訊ねました。

「一二年もしたら治るかも知れぬという心細い程度でして……………」

「薬なんかどうせききますまいから、やはり手術でしょう、なおす手だてとしては？」

「先ず其の通りですが、それは私の様な弱者には麻酔で其儘にでもなると危なくて嫌ですから、養生は消極的な方法ですけれども……………」

私は七時半に辞して田丸博士邸に向いました。曙町のあの暗い学者村をぬけて明るい電車通りに入るまで、先生の宅のさっぱりした応接間や、それにかかっていた油絵（多分青楓氏作か）の事や、憔悴した先生の姿などが目に残っていました。尊敬しているせいか、先生を訪問中は別世界にいるいい気持で町に出ると芝居から出た時のような気がしました。理科にはいい先生たちがいられる。

寅彦は大正 9 年（1920）5 月、『新小説』に「電車と風呂」、同年 6 月、『中央公論』に「丸善と三越」をペンネーム金米糖で書いているので、早速利用したものである。大正 9 年 11 月の訪問時の様子であろう。

②長谷川零余子^{れいよし}

明治 19 年（1886）～昭和 3 年（1928）。群馬県出身。本名は長谷川諧三（旧姓富田）。薬学専門学校から東京帝大薬学選科に進み明治 45 年卒業。明治 42 年（1909）に長谷川家の長女、かな女（明治 20 年～昭和 44 年）と結婚し養子となっている。高浜虚子に師事し、「ホトトギス」の編集に従事する。大正 10 年（1921）10 月、俳句雑誌『枯野』を創刊。昭和 3 年病気で急逝。

零余子が電気と文芸社に入った経緯は不明であるが、寅彦を訪問したのは虚子の示唆があったのだろう。ホトトギス時代の小品を出版する案も元々虚子が「寅彦小説集」編纂を計画していたものである（寅彦日記明治 41 年 10 月 22 日及び『藪柑子集』自序）。

ホトトギスを離れたのは枯野創刊時らしいので、ホトトギスの選者と『電気と文芸』の編集者とを兼ねていた時期があると思われる。山崎楽堂（東京帝大建築学科卒）や創刊号に祝辞を寄せ

ている鯨井恒太郎（東京帝大電気科卒）とはやはり大学時代の繋がりがあったのだろう。

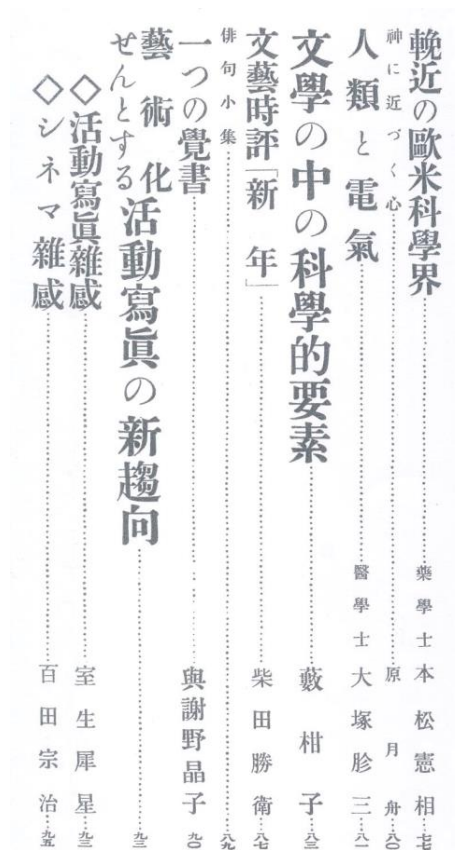
それにしても、杉田久女と一緒に寅彦を訪問して人生相談を持ちかけたり、自身の俳句雑誌創刊を告げるなど、原稿取りだけではない親しさが窺われるが、これは寅彦の対応がそういう気にさせたのであろう。『ホトトギス』大正10年10月号の巻頭に『枯野』創刊号の1頁広告を掲載し、創作及写生文として藪柑子執筆を予告しているが、題未定とあり結局書かれなかったようである。（『枯野』は未確認。）

③杉田久女

明治23年（1890）～昭和21年（1946）。鹿児島県出身の俳人。本名は杉田久^{ひさ}、旧姓赤堀。高浜虚子に師事。『電気と文芸』には創作「河畔に棲みて」「葉鶏頭」「四人室」を寄せている。俳句より小説に力を入れた時期があったのであろう。子供のある家庭婦人が小説や俳句で活躍するのは難しい時代であった。まして地方在住であれば猶更である。師である虚子には言えないことを相談する相手として、寅彦が選ばれたのだから、どちらかというとな保守的な意見しか出なかったのではなかろうか。



「文学の中の科学的要素」が掲載された
『電気と文芸』第2巻第1号表紙
(大正10年1月、日本近代文学館蔵)



『電気と文芸』
第2巻第1号 目次の一部

(附記) 寺田寅彦の長谷川零余子宛て書簡の掲載についてご了承をいただいた高知県立文学館に感謝致します。雑誌名『電気と文芸』などの固有名詞を含めて新漢字にしました。また仮名遣いを変更したところがあります。